

令和4年9月1日発行 春燈/第77巻第9号(毎月1回1日発行) 昭和21年7月22日第3種郵便物承認

春燈

2022 September

9
月号



安住敦の句

瞑りて冬の雲雀を聴きぬしか

『暦日抄』 昭和四十年

取手春燈句会の「利根の薄を見る会」に出席した折の句。
日頃の忙しさを離れ小春日和の冬の雲雀の下で独りを楽しんでおられるのでしょうか。下五を「聴きぬしか」と結び詠嘆に軽い疑問を含ませることにより、尚一層その思いを強めています。この句の碑を本多游子氏が師の十三回忌の御供養に取手本願寺の境内に建立されました。以前拝見したことがありますが、俳縁仏縁の敬愛の深さを感じます。

木多 芙美子

短命の蛭に老はなかるべし

『午前午後』昭和四十七年

命というものは、誠に優しいもので愛しい。死が一定であることは承知の上であつても、忍び寄る老いはどうする事も出来ない。蛭のように短命であるならば、青白く光る美しさのまま命を閉じる事が出来るのだが…。

師はふつとそんな事を思われていたのだろうか。誰しもが持つ拭い切れない不安と寂しき、人間の弱さ、悲しさを知り尽くされた上での詩情なのでしょう。

久保久子

名譽主宰 安立公彦

主宰 鈴木直充

郭公の胸毛風呼ぶ沖つ波

六月の四囲に山なき家居かな

店頭に列位のバナナ売られをり

天仰ぐをとこの愁ひ桜桃忌

けふ夏至とひとり頷く夕日中



麦の秋書道教室「おけいこ中」

白服に着こなしの皺ありにけり

遠雷やきのふの稿に筆を足す

かはほりや水音こもる橋の下

絆創膏道に貼り付く晩夏かな

当月集

鈴木直充選



○ 辻 泰 子

秘仏への結界深し梅雨寒し（杉本寺句）

蟻の列乱さず観音詣かな

慰霊の日待たず梯梧の咲きにけり

騒雨来る大海原のひとつこ

夕立来て島半分を覆ひけり

○ 立 竹 人

梅雨の朝あつけらかんと逝きたまふ

母死してすなはち蓮の浮葉かな

死化粧して明易の母の顔

はれやかな母の遺影や百合の花

赤く大きく母の遺影に夏の月

○ 秋 山 薦

川明り螢袋に灯の入りし

奢侈なれや川ぞひ卯木目に一里

重々しく風吹く日なり肥後菖蒲

暮れなづむ雨に潤ふ花菖蒲

万緑を割つて流るる川の音

○ 小 林 文 良

蜘蛛の囲や宿坊に酌む般若湯

さみだるる京の一条戻橋

雲と来る雨脚見ゆる白雨かな

日照雨去り未央柳の眉目かな

青芝にてんでに脱ぎし子らの靴

○ 坂 本 依 誌 子

橋三つ渡つて来る梅雨の月

短夜の明くる地球の鼓動かな

飲み比べ祖母の甘酒超ゆるは無し

三日締め三日陰干し単帯

話好きのひとに攪まる溽暑かな

春燈の句

鈴木直充選

停戦の手立てなきまま麦の秋(ウクライ)

東京 吉原世都子

コロナ禍の葬り慎まし閑古鳥

梅雨茸や樹齡千年太郎杉

ゆすらうめ女系家族に女児生るる

青黴のチーズとワイン真珠婚

京都 上西 良子

玻璃戸には今宵も守宮定位置に

妖精と逢ふやもしれず梅雨の森

鬼百合のつと首出す路地の角_ド

東京 紗 酔

身の丈が縮む夏至の日の太陽

雨色に額紫陽花の楚々として

朝顔市青色濃きを購へり

豪州の園灯スラリ夏の雲

山鳩やテラスに運びある朝餉

神奈川 木下 光代

香水の小瓶の中の私小説

あさがほの団十郎の今朝の見得

水草の花や古刹のお堀跡

そこかしこ文字摺草や夕河原

独り居や昼餉の伽羅蔭握り飯

隣より頂く新茶朝の膳

明易し気になることも二つ三つ

夕立のつかのま六区灯しけり

梅雨明や一家語らふ声響く

人力車スマホ決済梅雨明けぬ

冷奴四角四面に疲れけり

子の髪の日向の匂ひ夕薄暑

給食の今日の主役はさくらんぼ

白服の風を孕みて帆となりぬ

愛知 後藤 大

東京 鈴木としお

東京 中村 朋子

